

推薦図書

『永遠平和のために』
カント著 宇都宮芳明訳
岩波文庫

推薦教員
国際言語文化学科
李正勲助教

カント（1724-1804）は、「カント以前の哲学はすべてカントへと流れ込み、カント以後の哲学はカントから流れ出る」と比喻されるほど、近代哲学の進展に大きく貢献した哲学者です。それまでの経験主義と合理主義の対立を乗り越え改めて地平線を見出した人物であります。カントは哲学をはじめ、美学や自然科学、宗教、政治など多くの分野にかかわった学者でもあります。そのカントが晩年に著したのが『永遠平和のために』で、ここで彼は恒久的な平和のために必要な予備条項としての常備軍の撤廃や内政への不干涉、国債発行の禁止、また確定条項としての共和制の確立、諸国家の連合制度について提唱しています。例えば、常備軍が存在することで「たえず戦争の脅威」に晒され、軍拡にもつながり、さらには先制攻撃の原因にもなり得ると訴えました。その一方で、「自分や祖国を外からの攻撃に対して防備する」（17 頁）こと、つまり自衛手段については認めたことは興味深いです。また地球上に住むすべての人間にはほかの地域を訪問する権利と、またその住民と「交際」する権利をも有していると説明します。しかし、この「訪問の権利」（49 頁）にはその地域の住民との友好的関係が必要であるとも述べています。一生、生まれ故郷から遠く離れたことのないカントのことからすれば、途轍もない認識力に驚くばかりです。今日の国際政治において、不完全ではありながらも実現されている事項もあることを考えると尚更ですが。著書の最後に彼は、「真の永遠平和は、決して空虚な理念ではなく、われわれに課せられた課題である。この課題は次第に解決され、その目標にたえず接近することになる」（118 頁）と綴っているように、常に構想し実践することで平和なグローバル社会の実現もいずれは可能になるかもしれません。



3 階教員推薦図書架に展示しております。
ぜひ、手に取ってみてください。